展望

多様性を通しての統合性を求める

～映画理論の「新しい傾向に学ぶ」～

岩手大学教育学部教授
東京大学名誉教授
吉田章宏

「二一世紀」が近づいて来ているということが強く意識されるようになったのは、いつのころだったでしょうか。それは「世紀末」が近づいて来ると意識され始めたころと恐らく重なっていたでしょう。そして、まさに「世紀末」の現在は、これまで一〇〇年の来し方を振り返り、新しい世紀を展望するのに、最も相応(ふさわ)しい時期なのでしょう。それはまた、「温故知新」（故(ふる)きを温(たず)ねて新しきを知る）の時期でもあります。一つの峠を越えようとするとき、ふと立ち止まって、これまでの旅の多種多様な経験の道程を振り返り、その経験をこれからの旅に活かそうとする、そうした心のありように相応しい時期なのです。それは、年の暮れが、一年を振り返り、新年の夢を語り始める時期であるのにも似ています。絶望を克服し統合と英知に至る心境が相応しいと心理学者エリクソンが説く「老年期」にも似ています。

周知のとおり、昨一九九五年は、歴史上記念すべき映画誕生一〇〇年祭が世界各地で催された年でした。今年は、映画の歴史では、一足先の新世紀幕開けの年だったのです。

「映画」が一〇〇年の歴史を重ねれば、「映画の理論」もまた、一〇〇年の歴史を重ねて来たことになります。バラージュは、一九二

四年に、力強く語っていました。「理論は、芸術の旅人のための地図である」（ベラ・バラージュ著、佐々木基一ほか訳『視覚的人間：映画のドラマツルギー』、岩波文庫、一二ページ）と。その「映画の理論」の歴史を顧みるのに適しているかと思われる、以下の本にざっと目を通してみました。G.Mast, M.Cohen, & L.Braudy: *Film Theory and Criticism*. (Fourth Ed. Oxford UP.1992. pp.797.) がそれです。この本の冒頭に、つぎのようなことが指摘されています。

そろそろ映画の一〇〇年祭、「世紀末」が意識され始めた一九八〇年代の半ばごろから、映画の理論研究に、一つの「新しい傾向」が力を強め始めている。その際立った特徴は「統合的な傾向」である。例えば、歴史学、心理学、言語学などに負っているさまざまな洞察を、「映画一般ばかりでなく個々の映画を理解するに適した一つの統合へと融合させようと求める傾向」である、と。私は、この指摘を、二つの点から、興味深く思いました。

第一は、世紀末に現れた「新しい傾向」が、何かこれまでに全く無かった新奇な理論の突然の出現ではなくて、これまでに既にあったさまざまな洞察を「統合する傾向」だ、という点です。今世紀のそれぞれの時期に、「新しい傾向」と呼ばれたのは、恐らく、それまで無かった、少なくとも、それまでとは異なる、新しい視点を提供する理論の出現を意味したのではなかったでしょうか。「統合的な傾向」とは、「温故知新」であると共に、「多様性を通じての統一性」ということでもあります。そこには、多様性、つまり多様な豊かさが既に存在していることが、含意されています。まだ何も無いところに「統合」はあり得ないからです。世紀末とは、その世紀の歴史の中で、次から次へと出現しては消えて行った、その時々の多様な「新しい傾向」の累積からなる混沌に、ある統一的な視点から、秩序をもたらす理論的な動きに適した時期なのでしょう。

第二は、映画の理論に求められている「統合」が、単に「映画一般ばかりでなく個々の映画を理解するに適した一つの統合」である、という点です。もし理論が、「映画一般」を理解させるだけ、つまり、「そもそも映画というものは……」といったような理解を与えてくれるだけに過ぎないとしたら、映画の専門研究者はともかく、私たち素人の映画愛好家は、それに関心がもてないでしょう。映画を楽しむのに、「映画とは……」という理屈を知る必要などない、とも言えるからです。が、もし理論が「個々の映画を理解する」助けになる

のだとしたら、話は別でしょう。理論の助けなしにはできない、意外で、新鮮で、深く豊かな理解が、個々の映画について可能となり、映画の楽しみが倍加するというのですから。

この「新しい傾向」では、映画の意味の創造について、観客の「能動的な貢献」が強調されている、と言います。これは、既に創造された意味を受容する存在として、観客に「受動性」が仮定されていた時期とは対照的です。例えば、ナチスのゲッペルスによる宣伝映画や娯楽映画の背後には、観客の「受動性」の思想がありました。「新しい傾向」は、一つの映画・映像の意味が、一人ひとりの観客の能動的な貢献によって、積極的に多様に理解される、ということの理論的解明です。観客一人ひとりが、与えられた映画の映像に、それぞれの仕方で意味を付与する能動的活動をしていることを指摘し、その活動の具体的な姿への注目を、理論が促しているというのです。この能動性は、もちろん、映画の発生以来、観客において存在していた活動の特徴ではあるのです。が、映画一〇〇年の歴史の中で誕生し、多様に成熟し自立した、鋭い「批評眼」をもつ、多数の観客の存在によって、「能動性」が無視できない特徴として意識化され、理論化されることになった、ということなのでしょう。黒澤明監督の名作「羅生門」に描かれていた多視点性は、一つの事件の意味を理解する経験だけでなく、映画の意味を理解する経験に関しても、全く同様に存在するのです。

それは、映画の映像に限らず、あらゆる映像の「意味の創造」に、それを見る人間一人ひとりの「能動性」を認めることにもつながっていきます。それは、映像理解に「多視点性」を認めることと直結します。さらに、脚本やシナリオに対する演技者の抵抗、映画産業を取り巻く社会全体に対する映画製作者個人の抵抗、……など、など、社会全体に対する個人の能動性と多視点性を強調する傾向も、新しい「統合する傾向」には見られるようです。それは、人間の多様性と多視点性を認め、多くの視点を取れる柔軟で個性的な人間の教育を求める、教育における「多様化」の視点とも呼応しているようです。

こうして、「二一世紀にむけての教育課題」を考えることを促す世紀末は、「温故知新」、「統合への傾向」、「多様性を通しての統一性」、「多視点性」の「新しい傾向」に相応しい時期でもあるようです。映画理論・映像理論に限らず、教育理論の古典の数々に静かに学び、世紀末に相応しい、成熟した重厚な「新しい傾向」に参入したいものです。

展望 21世紀に向けての教育課題